

河童が教えてくれた水のこと

横浜市立生麦中学校

三年 藤井 彩音

バスで鶴見川を渡る時、私はいつも小さい頃に聞いた昔話を思い出します。

昔、鶴見川には九十九匹の河童が住んでいた。

今の鶴見川は静かで川面にはカヌーがすすいすすい進み、川辺では人々が散歩やジョギングを楽しんでいます。コンクリートで護岸が固められた典型的な都市型河川でも河童が潜んでいるように見えません。でも、橋の下や岸辺の草むらを見ていると、「もしかして…」と想像してしまいます。

昔の鶴見川は「暴れ川」と呼ばれ、何度も洪水を起こしていました。川幅は狭く、流れの速いところと淀みが交互に続く自然の川で、その九十九の淀みに、一匹ずつ河童が住んでいたと伝えられています。魚介類も豊富で

河童たちにとって暮らしやすい場所だったのでしょう。河童には、子どもをさらうなど恐ろしい話もありますが、溺れた人を助けたという言い伝えもあります。「平六」という名前の河童がいたずらのお詫びに手紙を書いた話からは、河童が地元の人々に親しまれていたことがうかがえます。

私は、鶴見川のことをもっと知りたくなり、小机にある鶴見川流域センターに行きました。そこで、昔の鶴見川がどれほど暴れ川だったかを学びました。昭和の終わりまで何度も氾濫し、人々は苦しめられてきたのです。二階にある立体地図では、赤青のメガネをかけると地形が浮かび上がって見えます。鶴見は台地が臨海部までせまり、浸食された谷と丘が入り混じる地形です。川沿いの市街地は平たんで、高低差が少なく、これでは洪水に弱いことが一目で分かりました。

川幅を広げたり、堤防を整備したり、川底をさらったりと、様々な工夫が行われ、二〇〇三年には新横浜に多目的遊水地が完成しました。これにより洪水のリスクがぐんと減りました。この整備には流域の町が長年にわたって協力し合ってきたそうです。片側だけ堤防を高くして

も、反対側の被害が増えるため、全体で支え合う必要があったのです。

私も実際に新横浜公園の遊水地を歩いてみました。その広さに驚きながら、「ここが大被害を防ぐために造られた場所なのか」と思うと、先人たちの知恵と努力に感動しました。特に、地域の人々が協力して川を守ってきたという話を聞いて、私はふと考えました。

もしかしたら、昔の河童たちも水を守っていたのではないか？溺れる人を助けたり、いたずらで水の怖さを伝えたり、そんな河童たちは水との向き合い方を人々に伝える『水の番人』のような存在だったのかもしれない。

現在も水害はなくなったわけではありません。温暖化の影響で「ゲリラ豪雨」や「異常気象」が頻発しています。水道管の老朽化による道路の冠水や陥没もニュースでよく目にします。数年前には、隣の大摩川で「内水氾濫」という新しい形の洪水が起きました。高層マンションが立並ぶ街が浸水している様子をテレビで見て、とても驚きました。買い物で行ったことのある場所だったからです。

もし、今も河童たちが居たら、自然と調和して生きる

ことの大切さを伝えてくれたと思います。私たちは今こそ、環境とどのように向き合うのかを考えるべきです。

かつて河童が住んでいたという鶴見川。暴れ川だったその流れは、人々の努力によって穏やかになりました。そして私たちは予測できない気候変動に備え、改めて知恵と工夫を重ねていかなければなりません。

バスで鶴見川を渡るたびに、橋の下や岸辺の影から河童がひょっこり顔を出し「自然と共存せよ」と警告してくれる気がします。私たちは温暖化の現実に向き合い、行動しなければなりません。